

## 【質疑応答】

司会　これから、あらかじめ会場から出していただいたご質問に対して、基調報告とパネラーの諸先生に答えていただきます。戴先生への質問があります。「先ほどの話して、司馬遼太郎と徳富蘇峰の類似性をいわれましたが、具体的にどのような点なのか教えてください。司馬遼太郎さんは、亡くなった後も国民的作家でありますから、戴先生が批判をされたというところで、とても印象に残りました」とあります。それと戴先生に追加発言五分以上という方もおられますが、今の司馬遼太郎と徳富蘇峰の点でお話をいただければ。

戴国輝　亡くなった人に対して後でむちを加えるというのではなくて、私は社会科学をやっている人間として、いつておくべきことをいいたいという、それだけです。彼は例えば、乃木將軍は台湾の支配の時に大変手こずったというのです。乃木將軍は大変な学問を持っていて、中国風にいえば儒將、儒学の学問のある將軍だということで、乃木大將の例の「山川草木……」の漢詩というのは、中国の一流の漢詩人も大変高く評価しているのです、そして、彼が武將としてどうだという際には、井上ひさしのお芝居などを参考にしているいろいろ考えておられるのです。

それは明らかに私が発掘した資料を利用しているわけです。それで僕が文句をいいたいのではなくて、利用の仕方に大きな問題があるんです。司馬さんの論を立て方は非常に中立的で、ニュートラルで、それでいて引用している人々に対して、だれの悪口もいわないで、実にうまくつなげていく。私のことは台湾史の良識があるといつて、その台湾史についての資料を彼はうまく使っているわけです。

例えば、私の一番大きな批判というのは、それは彼の言葉ではなくて、邱永漢の言葉を借りて、もし当時台湾が日本の植民地支配を受け入れなくて海南島みたいな状況だったら、今の海南島と同じようになつたのではないかといつているところです（『台湾紀行』六五頁参照）。ところが、ご存じのように邱永漢はもう独立運動なんかはやめてしまつて、今はむしろ中国の國務委員の顧問となつている。そのあたりのことは日本の皆さんには非常に理解しにくいんです。昭和三

〇年代に『文芸春秋』とか『中央公論』で独立運動を盛んに吹聴していた男が、今度は一転して、中国への資本主義進出を叫んで、台湾の商人を大陸に連れていく。日本的な論理だと、本当にわからないですね。

ところが司馬さんの問題は実は、昭和三〇年代の初期の邱永漢のあの論理をそのまま借りて書いている。日本が台湾を支配しなければ今日があつたかどうかというのは、歴史上でのIfの問題の立て方でナンセンスです。だけど、そういうように台湾の人がいい、日本人もいうから、多くの日本人はそれを受け入れてハッピーなんです。だれでも自分の祖先が悪いことをしたなどということ指摘されたくないのです、人間の情として。ところが、社会科学の論理としては、植民地支配を我々がもう一回肯定できるのかといえは、できないと思います。日本だつて植民地支配を受けたくないと思うんです。植民地支配というのは人間を大変スポイルするし、人間を侮蔑するメカニズムです。それ

を、結果論として、台湾の人がそういつているからといって、司馬さんは最後に、とても台湾の将来は心配だという。僕なんかからみれば、余計なお世話なんです。そんなのやめなさい。それを我々が勝手に北海道のことが心配だ、アイヌの問題が心配だ、沖繩の問題を心配していると、こういうことを私がいったら、皆さん、どう思いますか。不愉快でしょう。そんなのは台湾の人が自分で考えることです。だから、台湾人意識、あるいは台湾人として誇りある生活がしたいというところが、そのまま台湾独立の主張を生み出しているわけではない。といって、中国大陸と商売をやつて今もうけている連中が、ではただちに中共が今の体制を台湾に移して、台湾を支配することを歓迎するかといえば、しないんです。日本の研究者はその区別ができないんですよ。東大の某教授も、かつては僕の研究仲間だったんですが、その彼でさえ、わからんと。僕と二十年も一緒にやっているのに、それはわからんと。

そうしたら、結局敗戦直後の竹内好先生たちをはじめ、日本の中国研究はあれだけの本を出して、かんじんごことは何もわかつていないということと同じことになりはしないかということ、僕はいいたいんです。そうですね。そんな甘いものではないんです。僕は四十年もいたから、日本の大きな出版社に頼まれているんです、日本のことを書いてくれと。長くいればいるほど、日本のことは書けないんです、怖くて。ところが、何で日本の皆さんは、ちよつと台湾へ行つて帰つてきて、すぐにしゃあしゃあと格好よく書けるのか。言葉だつて、台湾には何種類もあるのですよ。

#### 司馬遼太郎の『台湾紀行』を批判する

司馬さんの『台湾紀行』というのは、彼が中国語でインタビューした人は一人もいないんです。台湾の言葉で聞いた人も一人もいない。みんな日本語ができる。

元日本の軍人だとか、そういう人の話ばかりなんです。

実に甘口で、こういう立派な日本人の技術者がこういうことを残しているとか、植民地支配というのは、動機論があり、過程論があり、結果論があるとかいいう。現在、日本が二つの原爆を食らって、これだけの経済復興ができるなんて考えていた日本の学者はいないんです。私の東京大学の恩師の東畑精一先生でさえ、戴君、おれはためだね、経済学を少しもわかっていない、といわれた。この事実をどう受け止め、どう考えるかということですよ。それを今の情報でうまく自己正当化して、韓国も台湾もしいては香港もシンガポールも、台湾五十年、韓国は三十六年、香港とシンガポールは三年六カ月、日本の植民地支配を受けた、あるいは軍事支配を受けた。だから、近代化ができた、アジアニーズはそうだという。ひどい論理ですよ。これで楽しんでいたので、やはり日本人は尊敬されません。自分にあまりにも甘え過ぎている。そんなものではないん

です。

だから、司馬さんのあの本を私は大変な悪書だと思う。ところが、そういう声は僕くらいで、台湾側の人は僕が批判していることを知らないで、あの中に私の名前が二〜三回出るから、戴先生、あなたと司馬さんとは親しいのですねという。親しいことと批判というのは別です。悪口をいうつもりはないんです。

徳富蘇峰も初期の作品は立派です。ところがその後、どうなったか。もう一遍皆さん読み直してごらん下さい。小島先生がいみじくも、大変な影響力を持っていたといわれた。そうです。その影響力が何であったか。司馬さんが国民的作家といわれる、今のあのブームとというのは何が落とし穴かということを、日本の学会でちゃんと総括できない、批判が出てこないということ、非常に危険です。そのことを私はしゃべりたいために、本日お邪魔したんです。だから、いずれちゃんとしたものを書きます。

## 批判意識の欠如が最大の問題

ただ、司馬さんの問題は、あの本を皆さんが読めばわかる通り、実に甘口です。個人についていえば、植民地体制においても、善意の人はいます。五味川純平さんの『人間の条件』を読んでごらん下さい。五味川さんは既にそれを主人公を通して描いているのです。あの体制の中でいくら個人がいいことをやろうとしても、結局は罪をよけいに深くするだけだと。だけでも、あの作品を読む若い人はいないし、あんな長い作品、長い映画はほとんど問題にされないです。それが今の日本の状況なんです。だから、大変な状況だと思っんです。私は再び日本と中国が戦う、あるいは日本とアジアが戦うということは、絶対に避けたい。避けたいから、こういう厳しい、あるいは辛口の日本批判をするわけです。いいですね。これを批判しなければ、四十一年間日本人の友人に支えられて研究できた

という私の良心はうずく。そういうことで、あえて申し上げたのです。

蘇峰と司馬さんの両方を、じっくり読んでもらいたいと思います。『現代思想』九月号に田村さんという若い女性が司馬さんを批判する文章を発表しているのですが、こういう日本の若い人がいるということは、ある意味では昭和四年、あの厳しい時に矢内原忠雄先生が大変な迫害の中で、満州国の問題を発言し、あるいは『帝国主義化の台湾』を出したのと重なる意味がある。だけど、昭和四年にはだれも聞こうとしないので、東大から追い出した。そうしておいて、戦後彼を東大総長に迎えたのは、同じ日本人なのです。その矢内原先生に対して、私があえて批判したというのは、やはりある制約があるなかで、それを超えましょう、一緒に、という思いからです。超えることによって、実は台湾というのは鏡になり、日本に新しい戦争の芽というのがなくなるのではないかということをやった。と

ところが、矢内原支持の東大の社会科学研究所の先生方というのは、必ずしもそうは思っていないませんでした。その甘さというのは、私が先ほど申し上げたように、司馬遼太郎に対する甘さと実は共通している、通底している。それでは、やはり二十一世紀のアジアにおける日本のリーダーシップというものは、容易に確立できない。そういう意味では、小島先生がいわれる、留学生が日本を嫌いになって帰るといえるのは、もともと根っこの部分がこの辺りと関係してくるのではないか。どうもありがとうございます。

司会 「今日発言された、日中各サイドそれぞれに、言いつ分があり、なかなか得るところがあつた。ただ案の定、日本側は感情的にどこか遠慮があり、自己否定的な意見が共通して見られる。中国側に物申すところがあつてよいのではないか。何もかも日本側に非ありでは、おかしいではないか。中国側の方が本音を出し

ていて、わかりやすい」と感想を述べられた上で、「日本に元気がない、進路が見えないのは、歴史を断絶したからだと考えております。帝国主義の戦争と結果を歴史の目で総括しなければいけないと思います。その意味で、日本のシンクタンクとしての満鉄調査部を評価していただけませんか」という質問が小島先生、戴先生にあります。

小島晋治 僕は直接には、満鉄や満鉄調査部の問題は研究していませんので、十分なお答えはできないことを、まずお許しいただきたいと思うのですけれども。満鉄調査部というのは、日本の戦前の研究機関としては最大の研究機関で、膨大な予算とたくさん優秀な研究者を擁して、旧満州の中国に関するいろいろな調査、農業の調査、市場の調査、それから家屋の調査、これは学問の遺産としては、かなり貴重な遺産が残されているというふうに思います。満鉄にかかわった研

究者のなかには、マルクス主義者がかなりおりました。マルクス主義というのは本来は非常に実践的な学問だと思えますけれども、実践はできないので、そういうマルクス主義の方法による中国社会の分析というのを主としてやろうとした。それでも、末期には何人もの研究者が逮捕されて、獄死した人たちもいる。といって、今の戴さんの御指摘とかかわるわけですけども、満鉄調査部の調査は基本的にはやはり日本のそういう植民地支配ということの中で、それと結合して行われてきたわけで、それによるいろいろな問題もある。どういうところにそれが具体的に出自しているのかというのは、まだ専門的な研究が必要だろうと思います。

例えば、満鉄におられた石堂先生、もう九十歳くらいの方で、かつて東大の英文科時代に日本の共産党で活動して、中野重治と親しい人です。現在でも非常にインディペンデントな左翼の立場から、非常に鋭い日本に対する批判を、あるいは日本の左翼に対する批判

も含めて書かれている。ちょっと珍しい日本人だと思うのですが、彼がやはり自分の属していた満鉄調査部について書いていて、徹底して否定的なんです。ちょっと僕は、もう少しそういう状況の中でも生み出すべき成果があるのではないかと思うのですけれども、中にいた人にそういう否定的総括が多いということなんです。そうではない、外側からの満鉄調査部の再評価の動きはあるように思いますけれども、まだそういう意味では全体的なきちんとした評価は出ていない。また、出すのは非常に難しい問題だというふうに、私は考えています。

**戴国焯** 実際、その経過から見ますと、日本の植民地支配というのは進行が非常に速いんです。だから台湾での調査は、今になって我々は台湾のかつての社会状況を知るための非常に貴重な資料になっているというところで、ありがたい思いはあるんです。しかし、あ

りがたいから、もう一回支配して、後藤新平に墓場から出てきてもらって、調査研究をやってもらおうということではない。区別できないんですね、学者というやつは。自分の都合のいいように褒めるわけです。臨時台湾旧慣調査もそうです。

もう一つの例を申しませう。数年前に私は初めて大英博物館に行きまして、同じく参観していたインド人のしゃべる英語を聞いたことがあります。彼は、何でおれたちの物がこんなところにならないといけないんだと、いつていたのです。この発想です。そのときに考えたんですが、大英帝国は七つの海を制覇して、これだけの物を集めて無料で見せてくれる。保存状態もいい。もしかして、それが中国やインドにそのままあつたとしたら悪いやつがいて盗掘したり、あるいは壊したかもしれない。しかし、だからといって、大英帝国のあの侵略を肯定していいんですか。皆さん、恐らく日本は原爆病の医学の面では一番進歩していると思

う。じゃあ、皆さんもう一回原爆を落としてほしいですか。違うと思います、論理が違うんです。

だから、大英博物館の存在も、日本の満鉄調査部も、それから後藤新平の台湾における旧慣調査も、どう我々が結果としてこれを利用して生かすかということと、それを彼らがやった意味とは違う。彼らの目的はあくまでも植民地支配を潤滑に支配するためだったのですが、実際はあの学問というのはほとんど間に合わなかつた。状況が進み過ぎて、ほとんど役に立っていない。ただ、資料として残つた。だけど、それを学者は利用して学位論文を書く。それで、後藤新平は偉いということでは困るんです。私はもちろん後藤新平を研究して、大変な日本人だ、ここまで中国人の弱さをつかんで、我々は本当にやられたなと思つた。あつぱれなライバルという評価をしています。しかし、私は無条件に後藤新平が大変な資料を残してくれたと一遍も感じたことはない。ところが日本の、もう亡くなつ



ているから名前をいいたくないけれども、アメリカ人がそういう旧慣調査を取り出してたずねてくることがあって、私に、いやあ、戴君、本当に後藤新平は立派だった、という先生がおりました。しかし、こんなのでは困るんです。これは全然違う。これではアジアの理解を得られません。

それは結果として残っただけです。台湾もインフラはやりました。病院もつくってくれました。では、病院は我々のためにつくったのかといえば、違うんです。台湾という投資先が衛生状態がよくなることで、それでもうける。植民地利潤を上げるためにつくったんです。そうでなかつたら、なんで今、日本人はアフリカに行つて病院をうんとつくりませんか。そういうことではないんです。人道的なものではないんです。植民地経営というのは、植民地で利益を獲得するためのものなんです。そのインフラというのは、戦後日本が負けたから置いていったんです。持ち帰れなかつた。そ

れだけの話です。それを我々が生かして、今日の台湾をつくり上げたというメカニズムがある。それを忘れてはいけません。それをつくったからいいということになれば、原爆を落として原爆病の研究が進んだから、原爆をもう一回落とせということになる。あるいは名古屋の地下街、当時我々が参観に行ったとき、すばらしいと思つたんですが、それは名古屋も大変な空爆を受けて、都市の再建構想の中で、あの地下街をつくつたんです。その地下街をモデルにして大阪の梅田の地下街ができた。それだけの話です。それを自己陶醉して、いろいろ解釈するというのは困る。それは社会科学ではない。庶民的感情としてはわかるが、社会科学ではない。ところが、問題は左翼だった先生方がそういう言い方をするので、私は実はこれは困つたなとずっと見ていたんです。

司会 それから、「日中関係に好ましい将来は、日

本人の中国蔑視の根本的な払拭なしにはあり得ないという感想を持ちます。いかにしてそれが可能かを知りたい。若い、過去に引きずられない世代に期待が持てないのでしょいか」。沢田先生あてのご質問です。

沢田ゆかり　蔑視をどうしたら払拭できるかということですが、突き詰めて蔑視というものがなくなるということはあり得ないですね。別に日本人だから、外国人だからということではなくて、自分と異なる他者に対して力の順位をつけたがるという人間の傾向は一般論として、なくならないと思いますが、ここではそういう一般論ではなくて、何が問題なのかについてお話しいたします。やはり蔑視で問題なのは、事実、実情からかけ離れて思い込みでやっている部分だと思います。先ほどの戴先生のお話をうかがっております、思い出したことがあります。私は小さいときに親の仕事の都合でアメリカで育ったのですが、そのとき

にアメリカの歴史の教科書で第二次世界大戦になると、原爆投下の正当性について習うんです。しかし、そのときに原爆の後遺症の話とか犠牲者が非戦闘員であったとか、そんな話は出てこない。圧倒的多数の学生はそういう面を意識しない。その結果として日本のファシズムだけに焦点が絞られていってしまうところに、何ともいえない不公平なものを感じました。その後教室でお前は侵略者だといわれましたし、アジア人全体に対する蔑視、髪の毛にチューイングガムをつけられたり、いろいろ嫌がらせも受けました。

私が今回一番にいたかったのは、自国の都合で教わったことをうのみにせず、自分と他者というものをもう少し客観的にみるという作業が、日中間に必要なのではないかということです。だから、ことさらに美しいイメージをつくり出すということは、私は必要だとは思わないのです。日本のアニメがいくらかおもしろくて、たとえ中国で「もののけ姫」が大ヒットしたと

しても、だからといって日本がそういうすばらしいアニメをつくる国だということで、間接的にいいイメージが出来ても、それがいかにもろいかというお話は、今日すでに出たと思います。ですから、お互い普通の国なんだ、いいところもあれば悪いところもあるというふうに見ていかなければいけない。そのためには何が必要かというところ、もつと日本を相対的に見る必要があると思うんです。

あまりいい例ではないかもしれませんが、例えば日本の家電製品はすばらしいと日本人はみんな思っている。日本の洗濯機、松下の洗濯機はどこに出しても恥ずかしくない、恐らく思っているでしょう。しかし、アジアの認識は必ずしもそうとは限らない。私が香港に駐在したとき、家具を揃えるにあたって知り合いに洗濯機を買うのにつき合ってもらったんです。そうすると、知り合いは、やっぱりフィリップス社製の方がいいよねという。いや、日本製のいいで

すよといったら、日本製は中の洗濯槽がプラスチックでしょう、あまり長くもたないよ、ステンレスの方が上等だ、それにオーデオもヨーロッパ製のを買おうといわれて、ソニーでも別に構わないのになあと云ったら、デザインの高級感がないじゃない、もつと家具調のどっしりした物の方がいいでしょうといわれたんです。そうか、日本の家電製品がアジアの新興工業国でよく売れたのは、価格と機能のバランスが良くて、かつ拡大しつつあった中産所得階層にマッチしたからであって、別に世界で一番すばらしい、というわけではないのだと改めて気付きました。

この例から考えてみますと、日本ですばらしいと自分で思い込んでいるものというのは、実は世界の中でどういうふうな位置づけられるのか、私たちは意外に分かっていない。たとえば日本で民主的だとか、独裁的だとか、人権とか、いろいろな肯定的に使われる言葉があります。私が自分の学生に対して聞けば、中国

は日本よりも独裁的です、中国は日本よりも民主化のレベルが低いですという答えが返ってきます。では、彼らが自分の国の民主化のレベルをどこまで知っているのというと、案外心許ない。国際的な信用という点では、中国は国際機関に借りた資金を踏み倒したことはない。返済をちゃんとしている。人権だつてアメリカ型の人権ではないにせよ、中国の中で確実に変化しており、評価できる場所も大いにあると思います。もちろん逆に評価できないところもたくさんある。だけど、日本とだけ比べて、自分の常識だけを視座にすると、簡単に蔑視におちいつてしまう。結局払拭というよりも、もう少し己の姿と相手の姿を冷静に見られるようにするのが大切です。同じことの繰り返しになります。相対的に世界の中で我々がどこの辺りにいるかを把握する必要があり、二分法はやめたいと思うんです。どっちがよくてどっちが悪い、どっちが上か下かという二分法ではなくて、もつときめ細かくこう

いう点がいい、こういう点が悪い、その原因は何か、ということを検討する。そうして自分の国を相対化して見るのが遠いようで近道だと思えます。

日本にあるのは中国への蔑視ばかりではありません。最近では中国脅威論が台頭しています。頭のいい華僑・華人が世界の経済を握っているとか、アジアの経済の中心は日本から中国に移りつつあるとか。そうかと思えば、中国の内陸はすごく遅れていて、石器時代みたいなんだと、極論がとにかく中国に関しては通用しやすい。そのテンションの高さこそが問題だと思うのです。日本だつて恥部があるわけですし、いいところだつていっぱいあるわけですから、そういう冷えた目で見ていけばよい。そして知る努力、自分が当たり前だと思っていることを常に疑っていくということが必要であつて、中国に関して断定するときに、ちょっと待てと一時停止して考える癖をつけて、どんなに情報を収集するというのが、一つの解決策になるかも

しません。

ですから、若い方がという話で、最後に蛇足かもしれませんが、私が危惧しているのは、日本でも中国でも私より上の世代は経験を通じて中国のいろいろな面を見ている。だから、事情が分かれば、そう簡単に断定できないということが分かる。けれども、若い世代は自分の限られた体験だけだと白黒をつけたがる場所があります。若い世代にばかり期待を押しつけてはだめでしょう。先人はちゃんと事実を検証させ、その知識を受け継がせていく責任があるのではないかと。自分たちは自分たちの世代で終わりです、あなたたちは責任がないから勝手にやりなさいといわれても困りますということです。以上です。

司会　　続くご質問は、「小説でテレビドラマにもなった『ニューヨークの北京人』と、上海人の『東京の上海人』の違いについて、私はいささか不愉快に感じま

した。なぜなら前者では北京人とアメリカ人が対等の人格であったのに、後者では日本人が人格を持った形象としては、描かれていなかったからです。莫先生はいかがお感じになりましたか」です。

莫邦富　『ニューヨークの北京人』と『東京の上海人』、この二つとも中国でもものすごくはやったテレビドラマであり、本であると。その中で、確かにご質問が指摘したように、読んで非常に不愉快なところがある。実は『東京の上海人』がテレビドラマ化された後、私は中国の新聞にこれを痛烈に批判した文章を書いて載せてもらったのです。しかし、中国人の多くは日本には来たことはない。ブラウン管から伝わってきた非常にリアリティーな映像に、戦争の経験とだぶらせて考えて、とてもあり得ることだと思ったことが受けた原因だと思えます。これが一つです。

ただ、私はむしろその二つのテレビドラマは、ある

意味では公平にアメリカ社会と日本社会を映し出していると思います。なぜかという点、確かにアメリカでは人種差別もいろいろあります。日本にいる中国人などはよくいいます、アメリカ帰りの留学生は親米派になり、日本帰りの留学生は反日派になると。隣の芝生はきれいというのは、やはりよくあることです。から。

実際私はアメリカに行くと、何回も取材しているのですが、帰ってから日本にいる中国人社会でいつも私はこういうふうな発言をしているのです。日本にいる中国人はアメリカに取材に行くけれども、アメリカにいる中国人は日本に取材に来る余裕とかチャンスにはあまり恵まれていないと。実際、例えば『ノーと言え中国』とかほかのいろいろな本は、日本では出版できたのですけれども、アメリカを批判したものの、例えば『中国を悪魔化するアメリカ』というような本、あるいは『ノーと言え中国』は、なぜアメリカで出版できなかったのか。そういう意味ではやはりアメリカ

は人種差別とか言語の面での偏りが歴然と存在している。しかし、なぜ『ニューヨークの北京人』は、アメリカ人を正当な人格者として描いているのか。これは、アメリカは確かにそういう差別とかいろいろあるけれども、競争の舞台をやはりある意味で公平に提供しているからなのです。

例えば、先ほど沢田先生もおっしゃったように、中国の国民などは日本を見るときは、一つは日本の製品を通して日本を見ているわけです。しかし、これははつきりいって、日本の製品を通して日本を見るのは、およそ昨年あたりで終わっていると思います。なぜかといいますが、昨年から中国の新聞では、むしろソニー、シャープ、松下などをつるし上げています。真つ正面から批判しているのです。ですから、日本の商品を通して日本をプラスの面に見ていた時期に一応終止符が打たれたんです。では、逆に今の中国国民の中で外国ブランドの認知度の高い順からいって、どこの製品な

のか。アメリカ製品、ドイツ製品、フランス製品、ヨーロッパの製品がかなり健闘している。日本製品は大幅に後退した。では、その交代劇がなぜ起きたのか。一つ非常に根本的な原因ですけれども、アメリカ人が中国に、あるいはヨーロッパ人が中国に進出したときに、彼らのアジア、中国の本部を例えば香港に、あるいは中国国内につくって、その本部長に中国人を抜擢するんです。そうすると、アメリカにいる中国人は、努力すればその努力が評価される、受け入れられることになる。では、日本は。

私は、博士課程を終えようとしたときに、日立の国際本部から声をかけられて、うちに来てくれないかと、新入社員として来てもらうのではなくてスペシャリストとして来てもらうと。ですから、いわゆる言い換えれば給料の差です。それを保証しますと。しかし、当時私はもし入ったら自分の将来を考えると、多分飛行機で東京から北京、上海、上海から北京、東京、いつ

も行ったり来たりしてしまうと思いますが、課長補佐になっていけるかどうかもわからないと。確かに中国に行く日本の会社の中国人などの名刺を見ると、中には課長とか部長代理とかいうのがありますが、これはあくまでも名刺上の肩書きです。日本の会社はこういう人たちを、才能があっても実績があっても、大手企業であればあるほど抜擢しません。これは日本に来て初めてわかった事実です。そうすると中国の留学生が書くのは、結局『東京の上海人』のような世界です。

では、東京のジャパニーズドリームというものを描けるものか。日本のマスコミなど、いわゆる不法労働者とか密航者を報道するときに、彼らがジャパニーズドリームを目指して日本にやってきたのだと書きます。私は最初からこれは笑い飛ばしているのです。彼らは、ジャパニーズドリームを求めするために日本に来たのではなくて、むしろ、彼らにとっては事業を興す原資を短期間につくるために最も効果的な国、そうい

うふうに割り切つて日本に來ているのです。私は親日家とまではいかないのですけれども、日本の悪口をいいたくない。日本で生活している以上は、日本が繁榮して、アジアの国々や私の出身国に評価されて、いい關係の國になつてもらいたいと思つています。その中で私の將來も開けるのだと。しかし残念ながら、私もジャパニーズドリームを描けない。在日中國人社會では、私を一人の成功者として見てくれているのですが、私は苦笑いです。

先週、ある電話会社の代理店の人が、その電話会社の人を装つて電話のメンテナンスに來たんですが、名刺も出さずにうちの電話にアダプターをつけようとする。当然彼に身分を証明する物の提示を求めたわけですが、提示してくれなかった。で、一一〇番をしたら、私に殴りかかった。しかし、警察が來て、まず日本人のいうことを聞く。そうしたら、かれは部屋にも入っていない、私の事務所に入っていないといふん

です。彼は、私が無理やり彼を事務所に引つ張り込んで、一一〇番したんですよと。そうすると、私はうちのアシスタントたちに聞けど。アシスタントは日本人だから、彼女に聞けど。彼女の話しを聞いて、やつと警察は事實がわかつて、そこで私は本当に怒つて、名刺ホルダーをたたきつけて、これを見てみると。私は普段警視庁の世話になつているのか、それとも私が警視庁の世話をしているのかと。こういうことはとても些細なことです。しかし、そういう些細なことが、先ほどおっしゃつたように差別ということになつて、傷になります。

私は発言力があるから、きょうここでいろいろいえるんです。あるいは、そのとき名刺ホルダーをたたきつけて、あの刑事が引つ込んだわけです。うちの家内にいわせると、もしあなたでなかつたら、ほかの中國人だつたら泣き寝入りするほかない。そうすると、その人が数年後中國に歸つたら、日本人万々歳といえま



すか。これは非常に生活にかかつていることでして、みんなそういう日本でいろいろな辛い体験をしている。日本というシステムが反日家の中国人を量産しているというのが、残念ながら現実です。

司会　ご質問の中にこういうのがございます。「アメリカの航空母艦の参観日には二十万人の人が集まります。敗戦後日本のあらゆる分野をアメリカが覆っております。これが変わらなければ、日本の新しいアジア観、中国観もできないのではないのでしょうか。もう少し突っ込んだ対米中関係における論点をお願いしたい」。この点について基調報告の第三番目に当たる三つの同盟ということと関連して、小島先生にお話しをしていただければと思います。

小島晋治　日本の二十世紀前半の中国との関係の中で非常に重要な位置を占めたのが、一つは一九〇二

年の日英同盟です。これはつまりロシアの満州占領に対抗してイギリスと結んだ同盟で、これを背景にして日本は日露戦争を行った。イギリスからの多くの経済的な援助も受けました。続いて第二次日英同盟を一九〇七年に結ぶわけですが、これは特定の国を対象としてというよりは、要するに日本が日露戦争で獲得した旧満州、それから朝鮮における権益をイギリスに保証させ、イギリスのインド支配も認める。同時にフランスやロシアとの協商も結んでいるわけですけれども、ドイツだけは結んでいない。そして、第一次大戦が起こりますと、この第二次日英同盟を根底にして日本は山東に出兵して、そして山東の権益をはじめとして旧満州南部の権益を大幅に拡大した。この日本の突出した中国侵略をある程度抑えるということもあって、第一次世界大戦後、世界的に民主主義あるいは平和主義の潮流が高まる中で、アメリカのイニシアチブでワシントン会議というのが開かれます、一九二一年

に。それで日本は、この国際協調によつて、以後中国政策を進めていくことを受け入れるわけです。日本内部も当時大正デモクラシー運動という国内の民主化運動があつて、それもあつてそれを受け入れている。

ところが、これが日本の恐慌、それから先ほど申し上げました一九二八年以後の強引な日本の武力干渉政策の中で、日本は国際的に孤立していく。アメリカ、イギリスは、国民党のナショナリズムと比較的に妥協する形で解決していくのに対して、日本は突出して孤立するわけです。国際連盟脱退。この孤立を救うために日本は、ナチスドイツとの防共協定というのを一九三六年に結びます。これは直接には、ドイツに対するいわば排他的同盟です。アメリカ、イギリスはそれに干渉する。当時ドイツはむしろ中国の国民党政府といふ関係にある。今度『南京の真実』という南京虐殺事件についての決定的な資料になる、ナチスドイツの党員の書いた日記が出版されておりますけれども、

当時、この作者は同盟防共協定は、むしろ日本とではなくて、国民党と結ぶべきだという意見だった人なんです。ですから、直接には防共協定は中国に対する排他的同盟ではないのですけれども、一九三八年にナチスドイツが満州国を承認すると、この防共協定というのは、ソ連それから抗戦中国に対する一つの排他的同盟という性格を持った。これがさらに一九四〇年の三国同盟になりますと、アメリカ、イギリス、ソ連、中国、これらをすべていわば敵対的なものとする排他的な三国同盟となるわけです。

日本は戦後、アメリカの占領下に置かれて、一九五〇年のサンフランシスコ講和条約以降は、アメリカとの同盟関係に入る。初期には明らかに目下の関係です。主たる対象はソ連であります。ソ連に対する排他的同盟で、軍事同盟であつて、かつ、中国も一九七二年の国交正常化までは、その明らかに対象としてあつた。冷戦が終りソ連が崩壊して、ソ連の軍

事力というのは溶けてなくなってしまう、アジアにおいては。これは例えば、日本海を動いているソ連の艦船の数などというのは、めちやくちやに激減している。いうに足りない。兵隊の給料が払えないという状況で、もうソ連の極東、東アジアにおける軍事力というのは、ほとんど問題にならない。そうならば、日米軍事同盟は解消すればよさそうなものですが、今回ご承知のとおりガイドラインを再解釈する。問題は、これは中国の周辺の中に台湾が入っている、明らかに。日本はつきりとは否定しない。この間、李鵬が来ても橋本龍太郎は、はつきりと台湾が入るといわなかった。北朝鮮が危険というけれども、実際は中国が対象なんだという疑惑を、中国は持っているわけです。

こういう状況を突破していくためには、僕は二つなすべきことがあると思います。一つは、やはり日米同盟というものを、かつてのように排他的な同盟にしない。かつて排他的同盟にした結果、日本はそれで戦

争に進んでいった。排他的同盟にしないためには、これはつまり中国、ロシア、北朝鮮、韓国、東南アジアの諸国、これらの諸国との高層のレベル及び下のレベルとの絶え間ない交流、協調と話し合いということによって、排他的同盟の色彩を薄めていくということが、まず一番なすべきことだ。これは戦争に至らないために。この努力は最近行われ始めているというふうな思われます。日本の橋本氏がロシアに行ったり、中国に行ったり、李鵬を呼んだり、こういう動きはもつと促進すべきだし、留学生問題を含めた国民的な交流とネットワークづくりというのを、特に中国、やがては北朝鮮まで含めた、そういう努力をすべきだろうと思います。

もう一つは、軍事的な色彩はできる限り弱めて、そういう意味では今、沖縄の米軍の配置の問題が、かつて沖縄で日本の少女が犠牲になったことをきっかけにして、かなり強い動きがあつて、少しかすんでしま

ました。やはり、アメリカは軍部としての独自の主張がありますから、本当はそれほど必要なくても、なかなかアメリカ自体はそう簡単には日本、沖縄における軍事力を減少しようとしないうでしようけれども、できる限りの努力を通じて軍事的な色彩というものを、つまりアメリカの日本における軍事的なプレゼンスというものを少なくしていく長期的な努力が必要だろう。それによつて、いわば二十世紀前半の排他的同盟が戦争に至つたその教訓から学ぶことができるのではないかと、うふうに思つています。僕は国際関係の専門ではないので、素人論議に近いのですけれども、大体そういうふうを考えています。

戴国輝 一分間だけ時間いただけますか。すみません、たくさんしゃべつて。私が学生の時の助手であつて大先輩の尾上先生が先ほどのお話しの最後に『十八史略』の五帝からとられた、あの言葉がありますよね。

これをぜひとも日本の方々がよく理解して、今の中国あるいは台湾を理解するといひと思ひます。要するに、明治維新以後の日本人は、近代化し過ぎたといつては恐縮ですが、そういうヨーロッパ的思考で中国人を理解しようとしてもわからないと思ひます。まだ『十八史略』に書かれているそんな境地にかなりの中国人はいるといひことです。要するに、権力とか統一とか独立とか文化大革命とかへつたくれで、どうやつても生きていくのだ、生活していくのだ、権力が何だ、そういうような雰囲気はまだ、中国大陆にも台湾の中にも根強く残つています。だから、日本の学者先生が統計資料とか新聞だけを読んで、中国を理解した気になると非常に危ない。

台湾の現在の新聞といひのは、日本の新聞と同じではないんです。新聞が新聞をつくるんです。新聞を書くのではない、報道するのではない。新聞記者が新聞をつくるんです。だからそれを読んで、何がうそで何

が本当か、我々はわかるんです。日本の人は知らない。それをそのまま受け入れるのは、やむを得ないところがあります。台湾はこの土曜日に投票がございまして、日本からかなり多くの人たちが行っております。その何人かに私は来る前にお会いして、台湾の新聞を読んだらだめだ。雑誌を読むな。選挙の現場に行けと、話しました。ところが、いかんせん言葉がわからないんです。その雰囲気だけでもわかれば、今度の二十九日の投票結果はわかります。今まで、やれ、台湾の人は統一反対だとか、独立賛成だとか語られてきたけれども、そんな形式論議では測れない。要するに、多くの台湾の人たちは、今の生活の方を大事にしたい。それが相変わらず中国人の社会に根強くある。そういう意味では、尾上先生がきょう出された『十八史略』の一節をぜひとも皆さん思い出しながら中国を理解してください。

とにかく隣の国ですから、台湾も中国も。私も帰っ

てから台湾の連中にいうんです。日本は大事な国だから、お金もうけのことばかりでなくて、日本の文化は中国をまねたとか、すぐそんな話ではなくて、日本の歴史をまじめに、日本の明治維新にどんなに苦しんで、そしてどういすばらしい人たちがいるかということ、その社会、文化を通じて勉強しなければだめだ。ところが残念なことに、四十一年間留守にして帰っていったのですが、まともに日本を論じている本もなければ、日本史の本もないんです。それが台湾の状況なんです。悲しいんですよ。それではいかん。だから、私どもが帰って、これから日本研究のリーダーとして何とか組織しようと思っている。もう六十六歳ですから、あと何年もないけれども頑張りたいと思います。そういう意味で、相互理解のためにあまり急がないで、表面的なことではなくて、あるいは日々の金とか、ああでもないこうでもないという話ではなくて、もっともっと庶民がどういう生活をしているか、何を考えて

いるか、この方が大事なんです。どうも。

司会　最後に一つ、私の感想を述べさせて下さい。  
二十世紀の日中関係は、十九世紀後半から始まった両  
国間の緊張した関係に規定されて、日本の中国への侵  
略と、それに対する中国の反抗が半世紀近く続き、個々  
人間で築いた友好、善意の関係がしばしば圧倒され、  
中斷され、果ては相互のゆがんだ理解が生じること  
になりました。そして、それをその後の半世紀も克服で  
きずに今に至っていると思います。そうした状況は、  
来るべき二十一世紀には、みんなの努力で時間をかけ  
てでも克服していかねばなりません。おかげ様で  
諸先生と会場の皆さんのご協力を得て、二十世紀の日  
中関係をどう捉えなおすべきかについての、実り多い  
議論ができたと思います。長時間にわたるご参加あり  
がとうございました。